

「ロータリー運動が倫理運動だからです。」

と書きました。世のため人のために倫理を提唱していく為には、先ず<ロータリアン自身が心を磨き、ロータリアン自身の職業倫理を高めなければ、世の中に倫理を提唱することが出来ない>ということなのです。

そして、卓話を聞き、異業種の良質な人達との接触を通じて、職業上のノウハウや人生万般の事を教わります。

教わったことは忘れていいのです。聞いては忘れ聞いては忘れしながら、その体験を積むことによって、初めてロータリーが身についてくるのです。

ザルで水を掬うような話ですが、しょっちゅうザルで水を掬っていると、その罅で水は溜まるし、やがてザルに苔が生えて水が掬えるというのです。

それは単なる知識だけでなく、そこに智恵が生まれます。

職業奉仕の原理もその智恵の一つなのですから、職業奉仕の実践は、先ず例会出席に始まるという所以なのです。

「職業を奉仕と考える」と言う考え方は、元来、日本人にはありません。だから、職業奉仕をロータリアンだけがいい気になって喋ってみても一般の人には理解 できない概念だと思います。キリスト教にとっての職業観は、旧約聖書の「創世記」にある楽園を喪失した人間が原罪を負った結果として「労働」があり、日本 には本来「農業即佛行」という職業観とは基本的に違うところです。

昭和51年5月号ロータリーの友にこんな記事が掲載されました。

「何処の病院でも、手術室の前に消毒室があります。その消毒室の壁には大きな鏡が取り付けられていて、医師は手術室に入る前に手洗いをし、消毒をします。鏡の前に立った外科医は、迅速に、正確に消毒しながら、鏡の中に写し出された自分の目に問いかけるのであります。

今から行わんとする手術は、人道に反してはいないか？良心に悖らないか？己の全能力を発揮できるか？を確かめた後、静かに手術室に入ります。

～手術が終り、最後の縫合が行われると、元の消毒室に戻り、手術着と手袋を脱ぎ、マスクを外してから、また鏡の前に立ちます。～なぜ鏡の前に立つのでしょうか？～身嗜みをするためでは勿論有りません。この動作は長年に亘って習慣付けられ、教えられたものだったのです。～即ち外科医は今行ってきた手術の批判 を鏡の中の、自分の眼に見るのです。

鏡のなかの眼から、手術は正しく行われたか？全力は発揮できたか？全て良心的に行われたか？と反省するのです。

「鏡は一瞬に全てを表す。鏡は冷たく隠蔽する事を知らない」と著者は言います。

そして、私は外科医として鏡の前のそれでありたいと同様、鏡の前のロータリアンでありたい。

～と書いているのです。(続きます)